# 令和４年度　小松市立高等学校　学校評価 【中間報告】

| 重点事項 | | 具体的取組 | | 主担当 | 現　状 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 取り組みの現状と今後の方向 | 中間評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善に努め、確かな学力の育成を図り、進路実現につなげる。その際、ICTやアクティブ・ラーニングの手法を活用する。特に、一人1台iPadを活用し、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す。 | 1 | 「主体的・対話的で深い学び」を目指し、生徒の自己肯定感を高め、自ら考え行動する力の育成やチャレンジ精神を育む実践をする。 | 教務課 | 学校全体の取り組みとして、生徒の表現力を伸ばすため、授業でiPad等を活用して、他者の意見や考えに触れることで学びを得ている生徒を増やしていきたい。 | 【満足度指標】<br>iPadを活用して、授業の理解に役立つようにしている生徒の割合を増やす。また、他者の意見や考えに触れることで学びを得ている生徒を増やす。 | 授業の中で日常的に他者の考えやまとめ方などを知り、学びを得ていることが役に立つ。授業評価のアンケートで「他者の意見や考えを知ることで、協働的な学びを深めている」の項目で「4：強くそう思う」と選ぶ生徒の割合が<br>A　60%以上　B　50%以上　C　40%以上　D　40%未満 | 7月に実施した生徒の学校価のアンケートによると、「他者の意見や考えを知ることで、協働的な学びを深めている」の項目で「4：強くそう思う」と選んだ生徒の割合は、1年生36%　2年生29.1%　3年生31%となった。<br>ICTの活用は行われているが、発問の工夫や思考力を育成するための授業設計、協働的な学びにつながる仕掛け等、教科を越えて共有していく必要がある。 | D　(32.0%) |
| | | 2 | ICT機器の積極的な利活用によって、効率的かつ効果的な工夫された授業を展開し、生徒の十分な学習内容の定着を図る。 | 教務課 | ICTを活用した授業が定着してきたので、機器の効果的な活用方法を考えていく必要がある。 | 【努力指標】<br>生徒が主体的に参加する授業を行い、生徒の表現力を高めている。 | 生徒の表現力を伸ばすためにiPadを積極的に活用した授業を行う。授業評価のアンケートで「他の生徒の意見を知ったり、発表を見たりして、協働的に学ぶ機会を設けている」の項目で「4：強くそう思う」と選ぶ教職員の割合が<br>A　60%以上　B　50%以上　C　40%以上　D　40%未満 | 7月に実施した教職員の学校評価生徒のアンケートによると、「他の生徒の意見を知ったり、発表を見たりして、協働的に学ぶ機会を設けている」の項目で「4：強くそう思う」と選んだ教職員の割合は、40.0%であった。<br>「3：ややそう思う」の回答が45.7%と4の回答より3の回答の方が多く見られる。ICTの活用などで、更なる「協働的な学び」につながる工夫をしていきたい。 | C (40.0%) |
| | | 3 | 「総合的な探究の時間」における個人発表やグループ発表、フィールドワーク等を通して、生徒の表現力を育成する。 | 教務課 | 昨年度授業や総合的な探究の時間における個人発表やグループ発表を通して、話したり発表したりする力がついてきたと感じる生徒は、7割程度いる。グループ発表やフィールドワークを通して、生徒の表現力を伸ばしていく。 | 【満足度指標】<br>総合的な探究の時間において、主体的な取り組みを通して、生徒の表現力や自己発信力が成長している。 | 総合的な探究の時間における生徒の主体的な取り組みを通して、生徒の表現力や自己発信力が成長したと思う生徒・教職員の割合が<br>A　90%以上<br>B　70%以上<br>C　50%以上<br>D　50%未満 | 総合的な探究の時間における生徒の主体的な取り組みを通して、生徒の表現力や自己発信力が成長したと思う(よくあてはまる、ややあてはまると回答した)生徒・教職員の割合は、生徒81.6%　教職員80.6%であった。<br>1年(よくあてはまる 17.1、ややあてはまる 65.1)<br>2年(よくあてはまる 59.7、ややあてはまる 20.8)<br>3年(よくあてはまる 31.5、ややあてはまる 50.4) | 生徒(81.6%)<br>教職員B(80.6%) |
| | | 4 | 学習支援アプリ(Classiなど)の学習動画配信やテスト配信など学習ツールを使い、生徒の「学びに向かう力」を涵養する。 | 教務課 | 昨年iPadが生徒全員に配布され、学校でも自宅でも、iPadを活用して学習に役立てられるようになった。学習支援アプリを用いて、個別最適な学びを通して、生徒の「学びに向かう力」を高めていきたい。 | 【成果指標】<br>学校でも自宅でもiPadを活用して、学習に役立てる。学習支援アプリを用いたりclassi の学習動画配信やテスト配信のツールを使い、個別最適な学びを通して、生徒の「学びに向かう力」を高める。 | 学習動画配信やテスト配信などiPadを活用し、生徒の「学びに向かう力」の指導に役立てている(よくあてはまる、あてはまる)教員の割合が<br>A　70%以上<br>B　50%以上<br>C　30%以上<br>D　30%未満 | 学習動画配信やテスト配信などiPadを活用し、生徒の「学びに向かう力」の指導に役立てている教員の割合は、(よくあてはまる 33.3%、あてはまる 41.7%)75%であった。 | A (75.0%) |
| | | 5 | 大学入学共通テストに対応できるように、1，2年生のうちに生徒の大学進学意識を向上させ、学力の定着を目指す。また、成績上位層から中間層の生徒を増やし伸ばすべく、模試分析に基づいた授業改善を行い、学力向上を目指す。 | 進路指導課 | 1年生では、進路希望を念頭に置いて文理選択できるよう指導するとともに、学力伸長に向けて継続的に努力するよう指導している。2年生では、具体的な目標を持たせ、様々な進路希望、学力層に応じた学習指導をしている。1，2年生で大学受験に対応できる基礎学力をつける必要がある。 | 【成果指標】<br>学年終了時までに組織的、系統的な指導によって学力が伸び、大学受験の基礎が築かれている。 | 模試による国語・数学・英語の各偏差値が50以上の生徒数が<br>国語：A　40人以上　B　35人以上<br>　　C　30人以上　D　30人未満<br>数学：A　30人以上　B　25人以上<br>　　C　20人以上　D　20人未満<br>英語：A　30人以上　B　25人以上<br>　　C　20人以上　D　20人未満 | 1年生7月進研記述模試で偏差値50以上の人数は、国語28名(昨年度25名)、数学19名(昨年度24名)、英語22名(昨年度30名)だった。数学と英語において、基礎基本の理解と定着が喫緊の課題である。<br>2年生7月進研記述模試で偏差値50以上の人数は、国語40名1(1年1月34名)、数学10名(1年1月14名)、英語15名(1年1月28名)だった。数学と英語において、成績中間層の弱点克服に向けた取り組みが必要である。<br>模試分析による授業改善などを通じて学力向上を図り、11月模試、1月模試で成績上位層の人数を増やしていきたい。 | 1年　国語　D<br>　　数学　D<br>　　英語　C<br>2年　国語　A<br>　　数学　D<br>　　英語　D |
| | | 6 | キャリア教育を通じて高い志を持たせるとともに、進路実現に向けて粘り強く学び続けるよう支援する。 | 進路指導課 | ここ数年、大学進学希望者が増加傾向にある。一方で、コロナ禍の影響で全県的に県内志向が強まり、国公立大学も私立大学も県内大学への入学が難化している。全国を視野に入れて挑戦する姿勢を育てる必要がある。 | 【成果指標】<br>自らの生き方や将来に対して高い意識を持つ生徒が、授業や補習、個別指導等を通して学力を伸ばし、国公立大学に現役で合格している。 | 国公立大学現役合格者数が<br>A　20人以上<br>B　15人以上<br>C　10人以上<br>D　10人未満 | 4月の3年生進路希望調査では、国公立大学47名、私立大学36名、短期大学14名、専門学校25名、就職5名、未定11名、未回答12名だった。これから出願が始まる学校推薦型選抜では、国公立大学に18名、私立大学に16名が挑戦する。各大学の受験情報を把握し、個別の受験指導を充実させて、進路実現を図る。ここまで進学補習や学習会、模擬試験を通じて学習の質、量ともに上げていくよう指導してきた。国公立大学の志望者が最後まであきらめずに努力を続けていけるように、面談や個別指導を充実させたい。 | 年度末に評価 |
| 2 | グローバル社会に対応できる自己発信力を高める。特に英語によるコミュニケーション能力を育成し、英語力向上を図る。 | 1 | 英検資格取得にむけて、受検級別に十分な対策をたてる必要がある。計画的に勉強に向えるよう、英検講座を実施し、2年次における実用英語技能検定や12月GTECのスコアアップを目指す。 | 教務課<br>進路指導課<br>英語科 | 昨年は卒業時の到達レベル人数で評価してきたが、3年次においては模試や大学受験があり英検の受検は難しくなる。生徒の資格取得に向けた英語スキルアップを1，2年次のうちに行っていくいく必要がある。 | 【成果指標】<br>実用英語技能検定およびGTECの受検を通して、2年次修了までに35%の生徒がCEFR　A2レベルに到達することを目標にして、五領域のスキルアップを目指す。 | 2年次修了までにCEFRA2レベル以上の生徒が<br>A　70人以上<br>B　55人以上<br>C　45人以上<br>D　45人未満 | 現2年生158名中、1年12月のGTECにおいて、CEFR-A2レベルの評価を受けている生徒は41名であった。英検に関しては、10月9日に行われた実用英語技能検定の結果待ちである。また、実用英語技能検定に関しては、1月にも行われるので、10月の検定で不合格となった生徒にも、再度のチャレンジを促していきたい。 | 年度末に評価 |
| 3 | 生徒一人ひとりの品格を高め、規範意識と社会性を身に付けさせるとともに、急速に変化する多様な社会に対応できる主体性を育む。 | 1 | 品位ある服装、爽やかな挨拶、時間厳守など、進路実現に直結する生活姿勢の改善に生徒自らが意識して取り組むよう指導する。遅刻をなくすために、年間を通し職員による登校指導や生徒の個別指導を行う。 | 生徒指導課 | 制服を正しく着こなす生徒は増えているが、まだ十分ではない。遅刻者の件数は減少傾向にあるが、常習的に遅刻する生徒がいる。 | 【成果指標】<br>1日の生徒の遅刻者の平均人数から判断する。 | 1日の生徒の遅刻者の平均人数が<br>A　1人以下　B　3人以下<br>C　5人以下　D　6人以上 | 時間を厳守し8時25分からの朝学習で落ち着いて学習できるように、8時20分までに登校するように指導した。1学期の1日平均の遅刻数は2.0人であった。昨年度よりも減少しているが後期は天候不良も予想される。より一層、余裕を持って登校するよう指導したい。 | B　(2.0名)<br>1年0.5名　2年0.6名　3年0.8名 |
| | | 2 | | 生徒指導課 | | 【満足度指標】<br>制服の着こなしに対する、教職員評価から判断する。 | 「生徒は制服を正しく着ている」という項目に対し、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた教職員の割合が<br>A　80%以上　B　70%以上　C　50%以上　D　50%未満 | | C　(51.4%) |
| 4 | 芸術コース及び部による地域貢献活動を積極的に行い、小松市民に愛される学校をめざす。 | 1 | 部活動をさらに活性化し、校内外の発表やボランティア活動等に積極的に取り組む。 | 生徒指導課 | コロナ禍により、校内外での発表やボランティア活動等の機会がほとんどなかった。 | 【努力指標】<br>部の発表や活動を通して生徒の発信力が養われる。 | すべての部による発表やボランティア活動等の実施回数がのべ<br>A　35回以上　B　30回以上　C　20回以上　D　20回未満 | 新型コロナウイルス感染防止のため、ボランティア活動等は行いにくい状態であるが、徐々に活動は再開されている。水害のボランティア活動にも複数の部活動が参加した。 | 年度末に評価 |
| | | 2 | 芸術コース入学希望者の確保のために、本校専攻生による出身中学校訪問・部活指導等、生徒主体の情宣活動を行うとともに、教員による体験入学希望者確保のため中学校訪問を行う。 | 芸術コース | コロナ禍により多くの行事が中止となっていたが、ようやく様々なり行事が戻りつつある。より積極的に対外行事に参加していくことと合わせて、新しい生活様式を意識した発信方法の工夫を行っていきたい。 | 【努力指標】<br>新しい生活様式を意識した発信方法の工夫を通して、芸術コースからの発信力が高まり、中学校の芸術コースに対する興味関心が向上している。 | 11月の芸術コース体験入学参加者数が<br>A　60名以上<br>B　59～50名<br>C　49～40名<br>D　39名以下 | この夏の体験入学希望者が非常に多く、最終的に80人に制限をかけなければならないほどであった。この秋は中学校側に向けて積極的に情宣活動を行い、11月の芸術コース体験入学に繋げたい。 | 年度末に評価 |
| 5 | 教職員の協働する力を高め、校務の効率化を図り、心身ともに健康な職場作りを行う。 | 1 | 超過勤務の時間を減らし、職員の心身の健康を守り、よりよい教育活動を行う基礎を確立する。そのために、会議の数を最小限に止め、またICT機器の有効活用に努める。 | 教頭 | 昨年度の超過勤務(80時間)を越えた職員の延べ人数は、年間で合計15名であった。大部分の職員はワークアンドライフバランスに努めているが、一部の職員で部活動を中心とした業務で超過勤務となっている。 | 【努力指標】<br>「定時退庁日」「ノー残業デー」をはじめ、日頃から業務の効率化を意識し、勤務時間内で業務が終了するよう努力する。 | 超過勤務80時間を越える職員の割合が、<br>A　2%未満<br>B　2～4%<br>C　4～6%<br>D　6%以上 | 第Ⅱ期(4～6月)の統計では超過勤務80時間を超える教職員の数は以下の通り。<br>4月：1名　5月：1名　6月：3名　計5名　であった。<br>6月は修学旅行と部活動指導業務に係る対象者であった。<br>今後も業務の効率化を図っていきたい。 | B　(3.8%) |